



建設地：標津郡中標津町
主な用途：店舗兼用住宅
用途地域：非線引き区域
建築面積：80.95㎡
延床面積：156.72㎡
構造階数：木造 地上2階

・森の豊かさを体感できる長いアプローチ
・銀色の小屋根には周辺環境の色が反映される

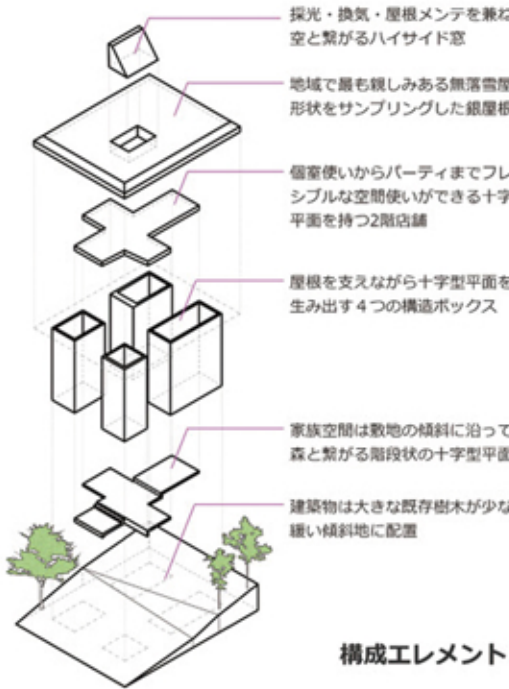
寒冷地の厳しさと予算上の制限から、外壁面積を抑えた四角形平面を基本とし、既存樹木の無い緩い傾斜地に建物を配置した。不恰好ともいえる建築のフォルムは、北海道において70年代から見られる最も馴染み深い無落雪屋根形状をサンプリングしたもので、「北海道の普通の家型」を想起させる形態とすることで、近づきやすい星付きレストランとなることを目指した。

料理と同時に森の表情も楽しめるよう、枝葉に近い2階をレストランにし、シェフの子供たちが気軽に土に触れられるよう1階を住居にあてた。長方形平面の四隅に配された構造も担うボックスが無落雪のフラット屋根を支え、その間に十字型の平面が生まれる。この平面形状によって、十字全体を使った一体的空間と、アルコープ状の個室のな場所が同時に存在し、利用人数やアクティビティに応じたフレキシブルな空間使いが、店舗と住居に共通して展開できると考えた。

兼用住宅であることから、二つのボックス内部を吹抜けや階段室とし、屋内建具の開閉によって店舗と住まいを繋げ、曜日や時間に応じ上下階の距離感をコントロールできるようにした。屋内建具の開閉は吹抜けとペントハウスを連続させ、建物全体の空気循環、冷暖房負荷の低減にも貢献する。ペントハウスはナイトパーズや雪下ろし作業時の安全な出入口としてはもちろん、弧断面を持つ銀天井への鈍い写り込みによって、屋根周囲に広がる木の動きや葉色を抽象化して室内へ届ける装置でもある。

1階床は地盤の傾斜と十字型の平面に呼応した階段状のステージとなっており、生活と森を連続させる。

「広い世界にある文化と、地元で入手できる親しみある素材とを、自分なりの方法で素直に調理する」というシェフの理念から生み出される料理には、静けさの中に、小さな驚きや発見が散りばめられている。我々はこの料理に対する夫妻の哲学を、ささやかな工夫を内包した小さな建築として表現することを志向した。



構成エレメント



敷地周辺図

■2階（レストラン）

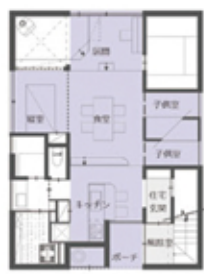


フレキシブルな空間使いができる十字型平面を持つ2階店舗

それぞれのアルコープから異なる表情の森を眺める

・一部の個室空間はカーテンなどにより広く仕切ることができる
・「個」と「全」の空間の重なり先に森が広がる奥行きのある空間

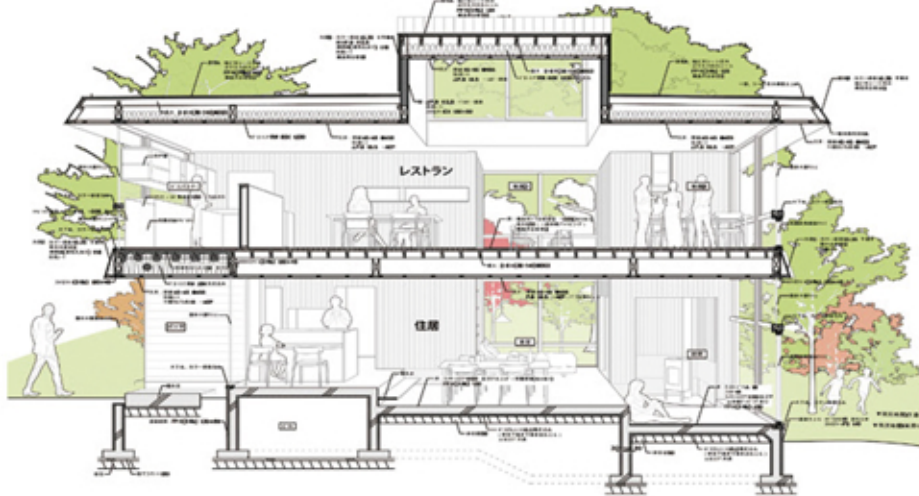
少人数での食事、団体でのパーティなど相反するアクティビティに対応できる空間と家族用の住居空間に共通して利用できる平面構成として十字型平面を採用した



1階平面図



2階平面図



断面パース



地域に愛され続ける親しみあるレストランをめざした

佇まいの考察

中標津市街地でもよくみられる北海道の無落雪屋根形状の典型

■1階（住居）



1階住居の「個」のスペースはカーテンなどによって緩やかに仕切ることができる

1階住居の十字型平面は敷地の傾斜に呼応した階段状の空間となり森へと続いてゆく

BOX内の吹抜けを介し1階と2階の間を気配や風が往来する